（研究ノート）

児童福祉施設実習における自己評価と実習先評価の比較検討

中原　大介

A Comparative Study of Students' Self-Evaluation and Institutional Evaluation on Their Practice in Child Welfare Facilities

Daisuke Nakahara

要約

本稿は実習終了後に行った学生の自己評価と実習先評価について比較検討を行ったものである。本校では一年次に3日間保育体験実習（保育所）、保育所実習（10日間）、児童福祉施設（居住型）実習（10日間）実習を行っている。実習終了後に事後指導を行うが、本学では事後指導の一貫としてレポート課題を課し、さらに各グループに分かれ討議をし発表を行う「実習ゼミ」を行っている。2005年度の事後指導では、それらの課題に加え実習先へ送付されている実習評価表を用いた自己評価を行った。

今回実習先で使われている評価表と評価項目を用いて自己評価を行い、その結果と実際の実習先からの評価との比較検討を行った。まず実習先での評価と学生自身の実習評価の差違について検討を行う。またその差違が生じた原因について考察を行った。さらにその結果を基にして今後の実習指導の中でより学生の学びが深くなり、また学生が客観的に自身の学びを振り返るために必要な援助について検討する。

キーワード：　児童福祉施設実習　自己評価　実習先評価　比較検討

2006年10月13日受理（実践研究）

1．はじめに

本校では、一年次の８月に3日間保育体験実習、11月に保育所実習（10日間）、1月末から2月にかけて児童福祉施設実習（居住型）（同じく10日間）が行われている。今年度は52名の学生が、児童福祉施設（居住型）での実習を行った。42名が児童養護施設で実習を行い、また、10名が乳児院で実習を行った。

実習終了後、本校で使用している実際の実習評価表を用いて学生自身が自己評価を行った。本校では実習の事後指導として、実習ゼミを設けている。各グループに分かれ、一日目はグループの内での報告、討議、二日目は全体で発表、質疑応答を行う。今年度の実習事後指導にはその他に学生自身による実習自己評価を取り入れた。

ひとつは、事前に立てた実習での目標を振り返るための実習振り返り表である。もうひとつは実際に施設に送付し、評価をいただいている評価表を用いた自己評価である。

一般的に実習終了後の自己評価については、実習先での評価表とは別に独自の項目を設けて自己評価を行うものや、実習評価表に沿って、自己評価を行うものがあると思われる。今回は実習先と同項目の実習評価表に沿った自己評価を行うこととした。

実習指導は事前指導、実習中の訪問指導、事後指導と三段階に分けて考えることができる。実習終了後の事後指導においてレポート課題を課したり、前述の実習ゼミなどを通して学生たちはより実習での学びを深めていくことができる。もちろん、その前提として事前指導による事前学習や課題設定、実習中の施設の指導者による指導、施設に生活する子どもたちとのかかわりなどの多くの学びがある。だからこそ最後の事後指導での成長につながるのだと思われる。

実習終了後、学生たちは実習先からの評価を思いのほか気にかけている。実際に尋ねてくる学生もあれば、全く関心を持たない学生もいる。学生に話を聞いてみると意外と客観的に自らの実習について自己評価を行っている学生は少なく、実習先からの評価を気にするばかりなのである。

今回、本稿では実習先から送付された実習評価表の

評価と学生が実習後に行った同じ評価項目を用いた実習自己評価表を比較調査することとした。この調査を通じて、実習先と学生の実習に対する評価の差異を明らかにし、今後の実習指導の参考とすることを目標とする。

2．調査方法

1) 評価表について

本校で用いられている評価表を利用する。評価はA「優れていることが多く見られた」、B「優れている点がいくつか見られた」、C「それなりにやりとげた」、D「不十分な点がいくつか見られた」、E「単位不認定」となっている。

また、評価される事項は①「子どもの理解」、②「子どもへの働きかけ」、③「実習生としての意欲・取り組み」、④「施設における保育士業務や役割の理解」、⑤「施設の具体的機能の理解」、⑥「指導を受ける態度」、⑦「実習記録の書き方・提出」、⑧「挨拶・言葉遣い」、⑨「総合評価」、の9項目となっている。

今回の調査では実習終了後評価をしていただき、各施設から郵送していただいた実習評価表を用いることとした。各学生の実習評価は、実習事後指導時間内で記入した実習自己評価表を用いることとした。なお、学生の実習自己評価表は評価項目については同じであるが、実習先に送付したものとは別の用紙に作成しなおしたものを使用した。

2) 調査方法について

まず、実習評価表、実習自己評価表ともに単純集計をとり、各事項別の評価について調査することにした。

また、評価はA・B・C・D・Eと五段階評価を行っているが、便宜上A評価を5、B評価を4、C評価を3、D評価を2、E評価を1と数値化し、各項目の平均値、各項目の相関関係を統計手法によって調査することとした。

さらに、実習自己評価と同時に行った「実習計画の振り返り」も必要に応じ参考にすることとした。

3．結果

1) 実習評価表、実習自己評価表の単純集計

項目①子どもの理解

施設からの実習評価表は「C」評価42.3%、「B」評価40.4%と合わせて「B」・「C」評価で80%を越えている。また、学生の自己評価では「B」評価40.4%、「C」評価34.6%となっている。「不十分な点が見られた」とされる「D」評価が学生の自己評価では19.2%であり、施設からの評価では7・7%であった。「D」評価については学生の自己評価のほうが多く見られた。

表1　項目①子どもの特性・行動感情についての理解

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	C	22	42.3%	B	21	40.4%
(2)	B	21	40.4%	C	18	34.6%
(3)	D	4	7.7%	D	10	19.2%
(4)	A	3	5.8%	A	1	1.9%
(5)	E	1	1.9%	E	1	1.9%
	無回答	1	1.9%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目②子どもへの働きかけ

施設からの実習評価表は「B」評価46.2%、「C」評価28.8%であった。学生の自己評価は「B」評価42.3%、「C」評価28.8%であった。この項目でも施設の「D」評価が9.6%であったのに対し、学生の自己評価においては25.0%と高い数値を示した。

表2　項目②　子どもへの働きかけ・ことばづかい等

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	B	24	46.2%	B	22	42.3%
(2)	C	15	28.8%	C	15	28.8%
(3)	A	7	13.5%	D	13	25.0%
(4)	D	5	9.6%	A	1	1.9%
(5)	E	1	1.9%	E	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目③実習生としての意欲、取り組み

施設からの実習評価表は「B」評価32.7%、「C」評価28.8%となっている。この事項については「優れた点が多く見られた」とされる「A」評価が23.1%見られた。これに対し学生の自己評価は、「C」評価、「D」

評価共に28.8%となっている。「A」評価については15.4%であった。この項目でも全体として、学生の自己評価よりも施設の実習評価のほうが高い結果が出ている。

表3　項目③ 実習生としての意欲・保育への取り組み

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	B	17	32.7%	B	13	25.0%
(2)	C	15	28.8%	C	15	28.8%
(3)	A	12	23.1%	D	15	28.8%
(4)	D	8	15.4%	A	8	15.4%
(5)	E	0	0.0%	E	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目④施設における保育士業務や役割の理解

施設からの実習評価は「C」評価53.8%、「B」評価が28.8%であった。「B」・「C」評価で80%を超える結果となった。これに対し、自己評価は「C」評価が34.6%、「D」評価が26.9%であった。

表4　項目④ 施設における保育士の業務や役割の理解

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	C	28	53.8%	C	18	34.6%
(2)	B	15	28.8%	D	14	26.9%
(3)	D	5	9.6%	B	10	19.2%
(4)	A	3	5.8%	A	5	9.6%
(5)	E	1	1.9%	E	4	7.7%
	無回答	0	0.0%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目⑤施設の具体的機能の理解

実習評価は「C」評価61.5%、「B」評価26.9%と「B」・「C」評価で90%近い評価となった。学生の自己評価は「C」評価38.5%、「D」評価36.5%となっている。また、「単位不認定」という「E」評価が9.6%であった。

表5　項目⑤ 施設の具体的機能についての理解

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	C	32	61.5%	C	20	38.5%
(2)	B	14	26.9%	D	19	36.5%
(3)	D	5	9.6%	E	5	9.6%
(4)	A	1	1.9%	B	4	7.7%
(5)	E	0	0.0%	A	1	1.9%
	無回答	0	0.0%	無回答	3	5.8%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目⑥指導を受ける態度

実習評価は「B」評価38.5%、「C」評価が36.5%となっている。また、「A」評価は15.4%であった。学生の自己評価は「C」評価、「B」評価共に28.8%、「A」評価は25.0%となっている。結果として、「A」評価については学生のほうが10%ほど高く評価を行っていた。

表6　項目⑥ 指導を受ける態度・実行の姿勢

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	B	20	38.5%	B	15	28.8%
(2)	C	19	36.5%	C	15	28.8%
(3)	A	8	15.4%	A	13	25.0%
(4)	D	4	7.7%	D	8	15.4%
(5)	E	1	1.9%	E	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目⑦実習記録の書き方、提出

施設からの評価は「B」評価、「C」評価共に38.5%となっていた。学生の自己評価は「B」評価28.8%、「C」評価26.9%、「D」評価25.0%と学生の自己評価は分散しているように見受けられた。

表7　項目⑦ 実習記録の書き方・提出状況など

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	B	20	38.5%	B	15	28.8%
(2)	C	20	38.5%	C	14	26.9%
(3)	D	11	21.2%	D	13	25.0%
(4)	A	1	1.9%	A	8	15.4%
(5)	E	0	0.0%	E	1	1.9%
	無回答	0	0.0%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目⑧挨拶・言葉づかい

施設からの評価は「B」評価51.9%、「A」評価、「C」評価共に21.2%となっている。学生の自己評価は「A」評価は17.3%であり、「B」評価34.6%、「C」評価28.8%となっている。傾向としては、施設の評価のほうが高い結果が出ている。

表8　項目⑧ あいさつ・ことばづかいなど

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	B	27	51.9%	B	18	34.6%
(2)	A	11	21.2%	C	15	28.8%
(3)	C	11	21.2%	A	9	17.3%
(4)	D	3	5.8%	D	9	17.3%
(5)	E	0	0.0%	E	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

項目⑨総合評価

実習評価表では「B」評価50.0%、「C」評価36.5%とB・C評価で80%を越える結果が出ている。これに対し、学生による自己評価では「C」評価57.7%、「B」評価、「D」評価共に19.2%となっている。全体的には学生の自己評価が低い数値を示している。

表9　項目⑨ 総合評価

	実習評価表(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	回答	回答数	構成比	回答	回答数	構成比
(1)	B	26	50.0%	C	30	57.7%
(2)	C	19	36.5%	B	10	19.2%
(3)	D	4	7.7%	D	10	19.2%
(4)	A	2	3.8%	A	1	1.9%
(5)	E	1	1.9%	E	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	無回答	1	1.9%
	計	52	100.0%	計	52	100.0%

2) 実習評価表、実習自己評価表の平均値比較

各評価表、自己評価表の各評価を数値化し平均値を示した。

一部項目を除いてわずかな差ではあるが実習評価表の平均値の方が高い結果を示した。つまり、学生の自己評価よりも実習先の評価が高い結果となっている。

ただし、項目⑥「指導を受ける態度」、項目⑦「実習記録の書き方」の項目については、学生の自己評価の平均値が施設の評価の平均値を上回った。項目⑥については、単純集計においても学生の自己評価が高い数値が出ている。

各評価表の全体的な傾向としては、評価表の全体平均は3.47であった。自己評価表の全体平均は3.19となっており、ここでも施設からの評価が学生の自己評価をやや上回っていることが示された。

表10　各評価項目平均値の一覧

	実習項目(施設評価)			実習自己評価(学生)	
	評価項目	平均値		評価項目	平均値
(1)	⑧あいさつ	3.88	(1)	⑥指導を受ける態度	3.64
(2)	③実習生としての意欲	3.63	(2)	⑧あいさつ	3.52
(3)	②子どもへの働きかけ	3.59	(3)	⑦実習記録の書き方	3.31
(4)	⑥指導を受ける態度	3.57	(4)	③実習生としての意欲	3.27
(5)	⑨総合評価	3.46	(5)	①子どもの特性理解	3.21
(6)	①子どもの特性理解	3.41	(6)	②子どもへの働きかけ	3.21
(7)	④保育士の業務理解	3.26	(7)	⑨総合評価	3.03
(8)	⑤施設の具体的機能理解	3.21	(8)	④保育士の業務理解	2.96
(9)	⑦実習記録の書き方	3.21	(9)	⑤施設の具体的機能理解	2.53
	総合平均値	3.47		総合平均値	3.19

a) 施設から送られた実習評価表

一番平均値が高かった評価項目は項目⑧「あいさつ・ことばづかい」で3.88ポイントであった。逆に一番平均値が低かったのは項目⑤「施設の具体的機能についての理解」と項目⑦「実習記録の書き方など」であった。

b) 学生の自己評価

一番平均値が高かった評価項目は項目⑥「指導を受ける態度」であり、一番平均値が低かったのは項

目⑤「施設の具体的機能についての理解」であった。

施設からの実習評価表と学生の自己評価の平均値を比較した際、以下の二点において特徴が見られた。

まず、項目⑧「あいさつ・ことばづかい」が両者とも比較的上位になっている。次に項目④「施設における保育士の業務等の理解」、項目⑤「施設の具体的機能についての理解」が両者ともに下位になっていた。比較的中間に属している項目は項目⑨「総合評価」、項目①「子どもの特性や行動などの理解」であった。

3) 実習評価表、実習自己評価表の相関関係

施設から送られた評価表の各評価事項について相関関係を調べたところ、全項目について相関関係が見られた。また、学生が行った自己評価表についても、項目⑨「総合評価」と全項目との相関関係が見られた。さらに、項目①「子どもの理解」と項目②「子どもへの働きかけ」、項目③「実習生としての意欲、取り組み」、項目④「施設における保育士業務や役割の理解」それぞれ三項目との相関関係が見られた。また、項目②「子どもへの働きかけ」と項目③「実習生としての意欲、取り組み」、項目④「施設における保育士業務や役割の理解」、項目⑤「施設の具体的機能の理解」、との相関関係が見られた。さらに、次の三つの項目についてもそれぞれ相関関係が見られた。

一つ目は項目③「実習生としての意欲・取り組み」と項目④「施設における保育士業務や役割の理解」、項目⑤「施設の具体的機能の理解」と相関関係が見られた。

二つ目は項目④「施設における保育士業務や役割の理解」と項目⑤「施設の具体的機能の理解」、項目⑥「指導を受ける態度」と相関関係が見られた。

三つ目は項目⑥「指導を受ける態度」と、項目⑧「挨拶・言葉遣い」との相関関係が見られた。

実習評価表と実習自己評価表の各評価項目については相関関係が見られなかった。

表11　項目⑨「総合評価」と各評価項目との相関関係

実習項目(施設評価)			実習自己評価(学生)		
	評価項目			評価項目	
(1)	①子どもの特性理解	.779**	(1)	①子どもの特性理解	.492**
(2)	②子どもへの働きかけ	.736**	(2)	②子どもへの働きかけ	.560**
(3)	③実習生としての意欲	.742**	(3)	③実習生としての意欲	.667**
(4)	④保育士の業務理解	.746**	(4)	④保育士の業務理解	.478**
(5)	⑤施設の具体的機能理解	.669**	(5)	⑤施設の具体的機能理解	.508**
(6)	⑥指導を受ける態度	.830**	(6)	⑥指導を受ける態度	.438**
(7)	⑦実習記録の書き方	.680**	(7)	⑦実習記録の書き方	.409**
(8)	⑧あいさつ	.678**	(8)	⑧あいさつ	.379**

**:$p<.01$

4．考察

1）単純集計から導き出される考察

まず、施設から送られた評価と学生の自己評価を対比すると、施設からの評価が高かったことが挙げられる。先行研究では「教員の実習園訪問報告書をみると、『やる気が見えない』『積極性に欠ける』といった実習園からの指摘も散見され、目的意識・意欲に対する実習園の評価が学生自身の評価に比較して低いのではないかと危惧されたが、幼稚園、保育所ともに高い評価を得た。」[1]とある。今回の単純集計でも、施設の種別の違いはあるが、同じような傾向が見られた。その理由として学生たちにとって2度目の10日間実習であり、初めて親元を離れ宿泊で実習を行ったり、かなりストレスのかかる状態で実習に取り組んでいたことが、自分自身を振り返ったときの自信のなさにつながっているのではないかと思われる。その反面、実習先の先生方はある一定の評価をしてくださっていることが理解できる。

単純集計の中で実習先評価と自己評価の大きな差異が見られたのは項目①「子どもの理解」および項目③「実習生としての意欲」、項目⑥「指導を受ける態度」の三項目であった。

まず、項目①については学生の実習振り返り表を検討した所、子どもの試し行為や、初めて出会う年齢層の高い子どもたち（学齢期や思春期の子どもたち）とのかかわりの難しさがこの評価項目の低さにつながったものと考えられる。実際、学生達が実習後に行った実習目標に対する自己評価でも、「中高生とは一部の子としか関われていなかった」や「小学生には自分から積極的に話しかけられたが、中高生には話しかけられなかった」などといった、学齢期特に中高生との関わりの難しさを挙げたものが多く見られている。その結果施設評価よりも自己評価の中で、D評価が散見された結果につながったのではないかと考えられる。

また、項目③「実習生としての意欲」についても、実習評価が学生の自己評価を上回る結果が出ている。特にA判定「優れている点が多く見られた」とする評価が実習先から出ていることに注目する必要があるだろう。これに反し、学生の評価は8ポイント低い結果が出ている。

この評価の差については、「実習先でどのように見られているか気になっている」という言葉を学生の口から耳にしたことがある。先生からの評価を気にするあまり自ら積極的に関わることが出来ていないという現象の現れであるといえるのではないだろうか。また、学生の実習に対する様々な要因による自信のなさや、学生自身の実習に対するモチベーションも影響を与えていると考えられる。

今回の実習については事前にグループ学習・発表、先輩からのメッセージ、さらには事前の施設見学、施設の先生の講演など学生の実習に対するイメージや問題意識を高め、より高いモチベーションをもてるような取り組みを行った。しかしながら、初めての宿泊実習であるということ、また、保育所や学童保育所など学生たちが慣れ親しんだ、また身近にある児童福祉施設とは違った施設で実習を行うことが学生たちのモチベーションに大きな影響を与えていることは充分に考えられる。

項目⑥「指導を受ける態度」については、学生が「優れている点が多く見られた」とするA評価が10ポイント近く高くなっていた。学生達は自ら振り返ったときに「指導を受ける態度」を取れていたと考えた学生たちは比較的多かったようである。

2）平均値の考察結果

評価される事項を平均値でそれぞれ比較した場合、わずかな差ではあるが、実習先からの実習評価のほうが学生の自己評価を上回った。逆に学生の評価が高かった項目について注目してみると、項目⑥実習を受ける態度および項目⑦実習記録の書き方の二項目が高い数値を示していた。先行研究では「体を動かしたり、服装や礼儀一般を守ったり、まじめさでカバーできたりする点に関してはある程度自信を持って「良」とか「優」の範囲内で評価を下しているものと受けとめられるが、しかし「保育能力」や「計画・事務処理能力」のようにいわゆるプロとして能力に関わる評価となると自らを低く位置づけているように窺える」[2]という結果が述べられている。しかし、本調査では「事務能力」と考えられるであろう項目⑦「実習記録」については学生の自己評価では3.31ポイントと上位に入っている。しかし、施設の評価では一番下位に位置づけられており、両者を比較した場合では大きく差が開いて

1　佐々木昌代　濱田芳子「幼稚園・保育所実習における学生の自己評価」日本保育学会大会発表論文抄録　52巻　406ページ　(1999)
2　岡本陽子　野田栄子「保育科学生の実習における自己評価－保育実習を通して－」日本保育学会大会発表論文抄録　39巻　386ページ　(1986)

いた。

この現象については、次のようなことが考えられる。実習先訪問や各施設との懇談会の中で「学ぶ姿勢がみられない学生が時々いる」と「記録の書き方ができていない」という施設からの指摘がよくある。つまり、学生としては「自分としては」学ぶ姿勢もあるし、「自分としては」記録も書いたつもりである、といった現象の現われと見ることができるだろう。また、実習目標の振り返りを見ていくと「先生と積極的に会話が出来れば良かった」や「先生が忙しそうだったりして、質問が出来なかった」など、もっと実習担当の先生や一緒のグループの先生方とコミュニケーションを取ることが出来れば良かったと考えている反省も数多く見られた。初めての環境で、また緊張のある中での実習となるので、先生方と学生もコミュニケーションを取りにくかった一面もあると思われる。しかし、実際は学生達の自己評価の方が高かったことを考えると、総合的には「自分自身としてはやる気を持って実習に取り組めた」という評価を自分自身に最終的に下していることが考えられる。また、実習記録についての評価を検討してみると、実習先からは基本的な文章作成能力不足（文法であったり、漢字の使い方など）をよく指摘されることを考慮しても、学生の評価よりも実習先の評価の方が低くなることは十分考えられる。もちろん、現場の先生方が「現場の職員として」の評価するのか、また「実習生として」の評価するのかによって差が現れることも考えられる。保育士養成協議会では実習評価のミニマムスタンダード作成の過程で、評価の基準が「完成された保育士でなく、保育者のキャリア発達の初期段階における充足度」であるということを施設に理解いただきたいとし、「『実習生として』すぐれている」・「『実習生』として適切である」、「『実習生として』努力を要する」と評価項目に「実習生として」という文言を付した。[3]しかし、そのような「実習生として」評価する、しないという問題もあるが、昨今言われる基本的な文章作成能力や、語彙力の低下、コミュニケーション能力の不足が実習先からの「実習記録」や「指導を受ける態度」に対する実習先からの評価につながっているように考えられる。

また、比較的両者の平均値が近かった項目①「子どもの特性と行動の理解」について検討してみる。この項目について、学生の実習振り返り表を検討してみると事前に立てた目標として、「実際の子どもたちの様子を知る」や「子どもたち一人一人の個性に合わせて接する」、「自分から関わっていくようにする」といった目標が見られた。このことから、子どもたちと関わる事については事前の目標として「自分から積極的に関わり」、「一人一人のことをしっかり見て」いきたいという意志を持って実習に臨めたことが分かる。しかしながら前述したように比較的年齢の高い中高生との関わりの難しさを感じていたように、全ての子どもたちと関われた、という実感は持てない学生も多くいたようだった。しかし比較的子どもたちと積極的に関わり、また実習先でもその事を評価してくださっていることがこの項目から理解できた。

次に学生・実習先共に平均値が低かった項目④「施設における保育士の業務等の理解」、項目⑤「施設の具体的機能についての理解」について検討してみる。

学生達の事前目標の振り返りを検討してみると、実際の子どもたちとの関わりの場面の中で「子どもの行動や先生の動きについて質問などをした」や子どもたちの生活援助として「料理・洗濯・掃除・片づけなど何をしたらよいのかを聞いた」という振り返りが比較的見られた。反面、施設が社会の中で果たす役割やどの様な立場で先生方が仕事をしているのかということを理解するという側面では、「パンフレットを見た」や「地域の交流があったが、しっかりと質問が出来なかった」という振り返りが見られた。

これらのことを考えてみると、学生・施設と共に平均値が低かったこの項目は学生の意識に大きなずれがあったように思われる。つまり、子どもと関わる、子どもたちの環境整備といった直接処遇の面については学生達も先生の行動や指示をしっかりと聞くことが出来ていたが、その他の面（地域社会での施設の果たす役割や児童福祉施設としてどの様に社会の役割を果たしているか）を重視しなかったことが大きな原因としてあげられると考える。

3）相関関係から導き出される考察

まず、施設から送られた実習評価については項目⑨「総合評価」と各項目が深く関連していた。つまり、総合評価がわかれば各評価項目についても同じ傾向が

3　社団法人　全国保育士養成協議会専門委員会編著『保育士養成資料集　効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅲ－保育実習指導のミニマムスタンダード－』社団法人　全国保育士養成協議会、75ページ、2005年。

見られるということである。先行研究によると、幼稚園で行われた教育実習評価ではあるが、実習評価について以下のような結論を導き出している。「幼稚園教育実習に限って言えば園からの評価は、総合評価との相関が強く、且つ評価項目間それぞれの結びつきが強いことから、極論すれば総合評価のみで評価できるということになる。」[4]今回の調査も、前述の研究と同じような傾向が見られた。このことを考えると、各項目については評価のばらつきはあるが、総合評価との相関関係があることを考慮すると、各学生の実習についておおむね総合評価と同じような傾向の評価をしてくださっていることが分かる。

また、学生の実習自己評価の関連性を見た場合、同じく項目⑨「総合評価」と各評価項目との関連が見られる。授業の一コマで行った自己評価であったが、学生たちは実習先の評価とは関係なく、自分自身の実習を全体的にはきちんと振り返り自己評価していると考えることができるであろう。

学生の実習自己評価の中で、項目⑨「総合評価」を除いた各項目で他の項目との相関関係がまったくなかった項目は項目⑦「実習記録」についての項目だけであった。このことは、実習課題の振り返りの項目にも現れている。全体を通して、実習記録について課題が残っていると振り返っている学生は52名中2名しかいなかった。このことは実習の実施時期が一年生の後期で、まだまだ経験が必要であったということ関係があると思われる。また先の項目でも述べたように学生たちは文書能力の自信のなさからか、また、学びの途中であるからか実習記録への関心が薄いと見てよいだろう。つまり、実習の中で総合的に評価される中には実習記録が関係してくるが、それ以外の子どものかかわりや、施設の役割理解の為に実習記録は関係ないと考えているのではないかと思われる。

逆に施設からの実習評価には「実習記録」と各項目の相関関係があった。このことは実習記録はもちろん実習の中に位置づけられた重要なものであり、その記録によって子どもの理解や子どもとの関わりが変化してくると現場の先生が考えていることを示しているのではないだろうか。また、日々の記録が子どもの姿を捉えなおし、子どもの処遇についても記録が基になることがあるとも考えているのではないだろうか。

また、項目①「子どもの理解」と項目②「子どもへの働きかけ」の関連が見られたことについては、前述の項目にも見られたが学生達は子どもの理解を進めていくためには、普段の生活の場で子どもたちと積極的に関わることが必要であると考えていることが推測される。このことは実習振り返り表の「子どもたちとのふれ合いを通してその子の個性を見るために会話、遊び方を工夫しました。」「色んな工夫をしたり、子どもから逃げず、正面から向き合おうと努力した」という記述にも現れている。

項目③「実習生としての意欲、取り組み」が項目②「子どもへの働きかけ」、項目④「施設における保育士業務や役割の理解」、項目⑤「施設の具体的機能の理解」とそれぞれ相関関係が見られた。このことは実習生としての意欲や取り組みが子どもへの働きかけと大きく関連が見られることは今までの単純集計や、平均値比較でも同じ傾向が出ており、かなり強い関連性があると考えることができるだろう。

また、項目④や項目⑤についても関連性が見られたことは、実習において学生の意欲や取り組む姿勢が子どもとの直接的な関わりだけにとどまらず、施設の具体的機能や保育士業務といった事柄に対しても積極的に理解をしようとする姿があったことを表していると思われる。

項目⑥「指導を受ける態度」と項目④「施設における保育士業務や役割の理解」、項目⑤「施設の具体的機能の理解」、項目⑧「挨拶・言葉づかい」それぞれの項目に関連性が見られた。このことは、実習に向かう学生の態度が高いものであると自ら自覚できている者は、熱心に実習先の指導者に施設や子どもの処遇について質問する機会もあっただろうし、挨拶や言葉遣いについても丁寧にするよう心がけていたことは想像することができる。

5．おわりに

これまで、各施設から送られた実習評価表と実習後に学生が各自行った実習自己評価表との比較を行ってきた。全体的な傾向としては、学生の自己評価よりも施設からの評価が若干高いことが明らかになった。実習先訪問で「実習生は頑張っていますよ。」と評価をいただく所もありながら、一方で「記録の書き方があ

4　大塚健樹「幼稚園教育実習評価と自己評価の比較－本学幼児教育科学生の場合－」盛岡大学短期大学部紀要　10巻　29ページ　(2000)

まり出来ていない」、「実習に対する積極性、意欲があまり見られない」という評価を頂くこともある。

また、実習先懇談会などで実習生の実習に臨む態度や記録の書き方についても問題に挙げられることが多々ある。今回の調査においても、確かに学生よりは高い評価を施設から頂いてはいるが、「実習生の意欲」や「記録の取り方」に対する評価については学生の意識との差が浮き彫りになったように思われる。

他の現場評価のずれに関する研究でも「評価表に学生の態度が消極的とあることは、実習は実習、授業は授業と分離した意識でいるため、教科が実習に関係していることをイメージし理解できないでいることにも原因していると考える。」[5]とある。この調査においても、より日常の授業内容と深く関わりのある項目④「施設における保育士業務や役割の理解」や項目⑤「施設の具体的機能の理解」が学生、施設共に低い評価であったことが明らかになった。

それぞれの学生の実習自己評価を検討した場合、学生の自己評価には各評価項目と総合評価との相関関係が見られた。しかし、実際の実習先での評価とは差異が生じている項目もあった。この点は「自らがどのように見られているか」というような第三者の立場に立って、客観的に自らを振り返ることが苦手な学生たちの姿を示しているのではないだろうか。もちろん、他者（実習先の先生達）の目を意識しすぎることで必要以上に自分の評価を低く見積もったり、意識しすぎることで動けなくなってしまうこともあることも理解できる。しかしながら、学生たちは他者からの評価を意識しつつ、しっかりと子どもと向き合っていくことを学んでいく必要があるように思う。

児童福祉施設実習には、前述のように学生にとっては比較的なじみの薄い施設であること、また宿泊実習といった緊張が高くなる要素が多く含まれている。しかしながら、保育士資格取得に向けての実習では「居住型施設」での実習は必須となっている。多くの子どもたちが直面している虐待問題や子どもの養育に関わる様々な問題を考える上では、この「居住型施設」での実習は必要なものであろうと考える。それ故に、施設の先生方は「現場の職員からの視点」でより高い実習生像を求めるのであろう。

だからこそ、実習生を送り出す養成校としては学生達の目的意識や知識、またマナーや記録の取り方についても最大限可能な限りの事前指導を行って送り出す必要があると考える。

この調査を通して実習先の子どもたちと積極的に関わり、何かを学び取ろうとしている学生達の姿と一定その姿を評価している施設の先生方の姿を確認することが出来た。これからはさらに子どもの対応の重要な鍵を握る記録の取り方であったり、社会におかれた児童福祉施設の役割などについても意欲を持って実習を通じて学べるよう援助する必要があるだろう。その為には日常の授業と実習の関連性を持たせるような事前指導を行ったり、先輩からのアドバイスなどを通じて日常の授業・学習の大切さを伝えていく必要があるように思われる。また、日常の友人同士やクラス集団の中で周りから自らがどのように見られているか、という「他者の視点」を意識させることも必要になってくるのではないだろうか。

今回の調査ではサンプル数が50数名分と少なかったことや、児童養護施設と乳児院の種別を分けることなく「居住型施設」として分析を行ったことなどが問題点として考えられる。これからも児童福祉施設実習の事前指導に力を入れると共に、継続的に学生の自己評価の分析を行い施設、学生共にどの様な実習に対するニーズを持ち、どの様なずれが生じているかを調査していくことも実習指導にとって必要なことではないかと考える。

＜参考文献＞

（1）教育・保育実習を考える会編『新版　施設実習の常識』蒼丘書林、1998年。

（2）小舘静枝・小林育子他『新訂　施設実習マニュアル』萌文書林、1992年。

（3）長根利紀代「保育科学生の実習園と自己評価にみる学生の成長について－教育実習を通して(ポスター発表I)－」日本保育学会大会発表論文抄録　57巻　742-743ページ　(2004)。

（4）大塚健樹 吉田恵子 斎藤修「教育実習保育実習における実習評価と自己評価の比較」盛岡大学短期大学部紀要　11巻　19-23ページ　(2001)

5　藪田一子「保育実習での意識の変容と現場評価のずれについて」全国保育士養成協議会第44回研究大会発表論文集　45ページ　(2005)

（5）社団法人　全国保育士養成協議会専門委員会編著『保育士養成資料集　効率的な保育実習のあり方に関する研究Ⅱ－保育実習指導のミニマムスタンダード確立に向けて－』社団法人　全国保育士養成協議会、2004年。

（なかはら　だいすけ　大阪総合福祉専門学校教員）